



HOKKAIDO UNIVERSITY

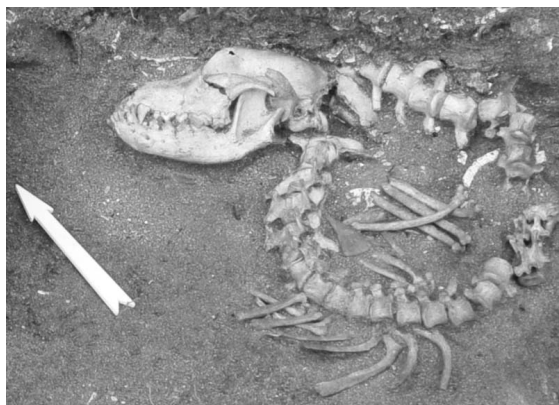
Title	北海礼文町浜中2遺跡 2011年度 考古学調査概要報告書
Author(s)	加藤, 博文; 岩波, 連; 平澤, 悠 他
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52658
Type	report
File Information	report2011-2-1.pdf



2011 年度

北海礼文町浜中 2 遺跡

考古学調査概要報告書



BHAP 2011-2017

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

例 言

1. 本概報は、2011年7月1日から8月6日にかけて、国際共同研究プロジェクト「バイカル・北海道考古学プロジェクト」の一環として行った北海道礼文郡礼文町浜中2遺跡の発掘調査の概報報告である。

2. 発掘調査は、北海道大学とアルバータ大学（カナダ）が組織主体となり、日本側の調査手続きは、北海道大学が行った。

発掘主体者 常本照樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター長）
発掘担当者 加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授）
調査員 A. Weber（アルバータ大学人類学部教授）
調査員 H. McKenzie（グラント・マッケンエワン大学人類学部）
調査員 D. White（オックスフォード大学考古学研究所）
調査員 山原敏朗（帯広市百年記念館）
調査員 友田哲弘（旭川市教育委員会）
調査員 佐藤孝雄（慶応義塾大学文学部）

遺跡名 浜中2遺跡（H-08-019）
所在地 北海道礼文郡礼文町大字船泊村ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5
発掘面積 48 m²

3. 本概要報告は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターにおいて行い、執筆は本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。執筆分担は以下の通りである。

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・加藤博文
第1章 バイカル・北海道考古学プロジェクトについて・・同上
第2章 浜中2遺跡の調査と概要・・・・・・・・・・同上
第3章 調査区について・・・・・・・・・・同上
第4章 検出された遺構・・・・・・・・・・同上
第5章 主な出土遺物・・・・・・・・・・同上
 ・土器・・・・・・・・岩波連（北海道大学大学院文学研究科修士課程）
 ・石器・・・・・・・・平澤悠（北海道大学大学院文学研究科修士課程）
 ・骨角器・・・・・・・・岩波連・平澤悠（北海道大学大学院文学研究科修士課程）
第6章 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・加藤博文

なお、出土遺物については、墓から出土した人骨資料については、琉球大学大学院医学研究科人体解剖学講座で石田肇教授を中心に整理を行い、出土動物遺存体は慶応義塾大学文学部民族考古学研究室において佐藤孝雄教授を中心に整理作業をおこなっている。また出土動物遺存体のうちカラフトブタとイヌについては、北海道大学大学院理学院遺伝的多様性研究室において増田隆一准教授を中心に分析を進めている。

4. 本調査で出土した資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターにおいて保管している。
5. 調査では、バイカル北海道考古学プロジェクトの一環として国際フィールドスクールを実施した。本発掘調査には、これらのフィールドスクールへの参加者である6カ国20名の海外からの学生、また国内からは、北海道大学、東京大学、慶応義塾大学、琉球大学の学生が参加した。
6. 発掘調査に際しては、調査地点地主である中谷栄氏のご理解とご協力を得た。また北海道アイヌ協会には調査への協力と支援を受けた。北海道アイヌ協会理事豊岡征則氏、同協会札幌支部貝沢文俊氏、新ひだか支部の吉村直希氏には、調査への参加および祖先供養および土地の神への祭礼の儀式をおこなっていただいた。

調査の準備と調査実施においては、小野徹町長、岩城修教育長、木村稔主幹、藤澤隆史社会教育主事をはじめ礼文町および礼文町教育委員会の支援と協力を得た。感謝の意を表する次第である。

目 次

第1章	バイカル・北海道考古学プロジェクトについて	1
第1節	プロジェクトの目的	1
第2節	礼文島での調査	1
第3節	研究組織	2
第4節	礼文島における国際フィールドスクール	2
第5節	地域の先住民コミュニティとの連携	2
第2章	浜中2遺跡の調査と概要	4
第1節	調査にいたる経緯	4
第2節	島の自然史	4
第3節	遺跡の立地	6
第4節	調査組織と参加者	6
第3章	調査区について	8
第1節	調査区の設定	8
第2節	調査区の層序	8
第4章	検出された遺構	14
第1節	墓	14
第2節	集石遺構	14
第5章	主な出土遺物	17
第1節	出土遺物の構成	17
第2節	土器類	17
第3節	石器類	20
第3節	骨角器類	23
第6章	まとめ	27

第1章 バイカル・北海道考古学プロジェクトについて

第1節 プロジェクトの目的

バイカル北海道考古学プロジェクト（BHAP）は、カナダ、イギリス、アメリカ、ドイツ、ロシア、日本の研究機関によって組織された完新世の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動を比較研究する国際共同研究である。2011年1月から2017年12月までの7年間は、カナダ社会科学・人文科学研究審議会（SSHRC）の中核的共同研究助成（MCRI）の支援を受けて実施されている。

本プロジェクトでは、完新世初頭の気候環境変動の中で、狩猟採集民社会がいかに地域的環境に適応し、独自の文化的多様性を生み出してきたのかを解明することに主眼をおいている。

狩猟採集民に関する考古学研究には長い歴史があるが、とりわけ北半球の狩猟採集民社会の多様な環境条件への適応行動、そしてその適応行動を通じて生み出された文化的多様性については、多くの関心が寄せられてきた。しかし個別具体的な地域モデルとして、環境変化への適応行動の詳細な様相は、未だ十分に解明されていない。

プロジェクトでは、

- 1) 内陸部と海岸部という異なる環境条件下での狩猟採集民社会の文化変動を検証し、
- 2) 生物考古学的手法を利用して具体的に環境変化が集団や個人の適応行動に及ぼした影響を検証し、
- 3) 遺跡と遺跡周辺でのサンプリングに基づく、気候環境変動に関する高精度復元データの集成などという多領域の研究者の参画による学際的な視座と手法による総合的な研究を展開していく。

現在、このプロジェクトの主要なフィールドとしては、ユーラシア大陸内部と太平洋沿岸という大きく異なる環境条件下での完新世初頭の狩猟採集民社会の比較研究を進めている。大陸内部のフィールドとしては、東シベリアのバイカル湖周辺における新石器文化から青銅器文化への文化的変遷に焦点を当て、文化変化の動態と環境適応行動の解明を進めている。方や太平洋沿岸地域の事例としては、日本列島北部の狩猟採集民社会の文化的動態と環境適応行動の復元を進めていく計画である。

第2節 礼文島での調査

北海道島の西方60kmに位置する礼文島は、これまでも貴重かつ良好な考古学的、人類学的資料が発見される重要なフィールドとして広く学会において知られてきた。これまでの調査において縄文中期以降、アイヌ文化期に至る長い時間軸の中で、南北から島に渡来した集団の居住痕跡が数多く残されている。とりわけ島北部の砂丘群には、厚い貝層や墓の存在が知られてきた。

本プロジェクトでは、完新世初頭の狩猟採集民社会における文化変化と環境適応行動の復元を目指す目的から、この礼文島の遺跡の特性に注目し、とくに島北端部の船舶湾域の遺跡群において、1) 居住地点における生業活動の時期的変遷、2) 砂丘形成過程と生業活動面の形成過程の相関関係、3) 古人骨資料からの集団系統や古食性データに関するサンプルの収集、4) 遺跡周辺の古環境データの集成を実施していくこととした。

第3節 研究組織

BHAPは、アルバータ大学人類学部（カナダ）に事務局をおき、北海道における研究拠点として

は北海道大学が受入機関となっている。研究組織に参加する研究者は、複数国の諸機関にまたがっており、2011 年段階では、以下のような体制となっている。

研究代表者：Andrzej, WEBER（アルバータ大学人類学部教授：考古学）

研究分担者：Fiana, BAMFORTH（アルバータ大学医学部教授：分子遺伝学）

Andrew, BUSH（アルバータ大学地球科学部：地球科学）

Ol'ga, GURYUNOVA（ロシア科学アカデミー上級研究員：考古学）

石田肇（琉球大学大学院医学研究科教授：形質人類学）

Peter, JORDAN（アバディーン大学考古学部上級講師：考古学）

加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授：考古学）

Angela, LIVERSE（サスカチュワン大学考古学部講師：形質人類学）

Robert, LOSEAY（アルバータ大学考古学部講師：動物考古学）

Hugh, MCKENZIE（マックエワンカレッジ人類学部講師：考古学）

Rick, SHULTING（オックスフォード大学考古学部講師：考古学）

Dongya, YANG（サイモンフレーザー大学考古学部准教授：分子遺伝学）

米田穰（東京大学総合研究博物館教授：同位体科学、考古年代学）

連携研究者：安達登（山梨大学医学部教授・人類学）

Uladimir, BAZALINSKIJ（イルクーツク大学歴史学部上級研究員：考古学）

Elena, BEZRKOVA（ロシア科学アカデミー上級研究員：古環境科学）

Mark, HUDOSN（西九州大学リハビリテーション学部教授：人類学）

Artur, KHALINSKIJ（イルクーツク国立技術大学教授：考古学）

増田隆一（北海道大学大学院理学研究院准教授：分子遺伝学）

佐藤孝雄（慶応義塾大学文学部教授：動物考古学）

Theodore, SCHURR（ペンシルベニア大学人類学部教授：分子遺伝学）

鈴木建治（北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員：考古学）

Pavel, TARASOV（ベルリン自由大学地球科学部研究員：古環境科学）

友田哲弘（旭川市教育委員会文化課：考古学）

Dustin, WHITE（オックスフォード大学考古学部研究員：地質考古学）

米延仁志（鳴門教育大学自然・生活系教育部准教授：古気候学）

山原敏朗（帯広百年記念館学芸員：考古学）

第4節 礼文島における国際フィールドスクール

BHAP では、考古学調査を通じた次世代の若手研究者の育成をプロジェクトの重要な柱の一つに据えている。本プロジェクトでは研究組織に見られるように多様な領域の研究者が複数の国の研究機関より参加している。また主要な野外フィールドの一つである礼文島における調査では、古環境データを含めた多用な考古情報を発掘調査を通じて調査体験することが可能である。このような良好な教育条件を活用して国際的なフィールドスクールをプロジェクトを企画実施した。本フィールドスクールを通じて、各国から集まる若手研究者や、アイヌ民族を含めた先住民族出身の研究者の育成をプロジェクトとして積極的に支援していく予定である。

第5節 地域の先住民族コミュニティとの連携

BHAP では、カナダにおける研究助成申請段階より、若手研究者と育成と並んで、地元の先住民族コミュニティとの連携関係の構築の必要性が指摘された。BHAP では研究助成の申請時より、北海道アイヌ協会と緊密に連絡をとり、プロジェクト側が目的とする研究の方向性や手法、そしてその効果と影響についてのインフォームドコンセントを行った。また北海道アイヌ協会側がプロジェクト側に期待する側面についてのヒアリングを行うことから、双方向の協力体制の構築を目指すべく調整を行ってきた。その結果、北海道における考古学遺跡の調査、アイヌ民族を含めた北海道島の集団系統、集団形成過程についての人類学的研究についての合意文書を作成し、プロジェクトをスタートさせている。またこの合意文書は、カナダ社会科学・人文科学研究審議会（SSHRC）に提出した。このような取り組みを通じて、2011年7月には、北海道アイヌ協会を通じて参加を希望した有志が調査に参加し、また遺跡調査の無事を祈願する儀式を浜中2遺跡においてプロジェクトと共同で実施している。このような取り組みは、海外から参加した各国の研究者や学生にもアイヌ文化を知る上で貴重な体験となった。

第2章 浜中2遺跡の調査と概要

第1節 調査にいたる経緯

バイカル北海道考古学プロジェクト（BHAP）では、完新世の狩猟採集民社会の地域的多様性と、環境変化がその多様性形成に果たした役割を解明することを目的としている。プロジェクトでは、地域ごとに異なる環境適応行動を検証するために、内陸シベリアと太平洋沿岸地域の二つのメインフィールドを準備し、それぞれの地域における狩猟採集民の文化変化と環境適応行動の比較研究を実施している。

2011年度の具体的なプロジェクトの活動項目としては、太平洋沿岸地域での時間的変遷を辿ることのできる良好な多層位遺跡の確保と国際共同調査の準備、そして次世代の若手研究者育成のための国際フィールドスクールが企画された。国際共同調査のフィールドとしては、これまで内陸シベリアのバイカル湖周辺において狩猟採集民社会の文化的動態の検証を行ってきた実績を踏まえて、太平洋沿岸地域における長期的な文化的変遷を追跡できる多層位遺跡を調査対象とすべく、候補地を検討した。また調査フィールドの選定においては、BHAPに参加する研究者の専門領域が考古学にとどまらず、環境科学や生物学、人類学などの各種領域にわたるため遺跡周辺の環境情報の入手という視点からも調査フィールドの検討をおこなった。

検討の結果、国際共同研究の候補地としては、礼文島北部の遺跡群が有力視された。その理由としては、礼文島には、1）縄文中期以来、幾度のなく、南や北から海流によって集団の往来があったこと。2）島という独自の環境がこのような外来の文化的影響を観察するのに適していること。3）縄文文化期からアイヌ文化期までの連続した人々の生活の営みが厚く堆積した砂丘層中に累積していること。4）遺物包含層には厚い貝層や獣骨層が含まれ、生業活動の復元が可能であること。5）集落遺跡に隣接して埋葬地が形成されており、生物考古学的な調査研究が可能であること。6）考古学資料も多様であり、さまざまな調査手法を教授するフィールドとして適していること、などである。

最終的にこれまで数多くの埋葬遺跡が調査され、また文化層が層位的に確認されている礼文島船舶湾地域を調査対象とこととなり、調査候補地として船舶遺跡と浜中2遺跡2カ所が予定された。特に船舶遺跡においては、縄文文化期の埋葬事例を、浜中2遺跡では累積する貝層からの生業復元データの収集を目的とした調査を行うことをめざし、礼文町教育委員会と協議に入った。

後に船舶遺跡については、1998年に実施した緊急調査時の出土遺物が重要文化財としての登録を進める計画が現実化したことから、礼文町教育委員会と協議した結果、急遽2011年度の調査対象値が除外することとし、浜中2遺跡において2011年度の国際共同調査と国際フィールドスクールを実施することとした。

第2節 島の自然史

礼文島は、北海道島の北西約60kmに位置する離島である。南北に約25.8km、東西に7.9kmと南北に細長く伸びる島である。島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入り江状の地形を作り出している。島の北部は、一点して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まれた船舶湾は、遠浅の大きな内湾地形をつくりだしており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘状地形が広がっている。



1: 浜中 2 遺跡、 2 : 浜中 I 遺跡、 3 : 神崎遺跡、 4 : 浜中 5 遺跡、 5 : 重平衛沢 1 遺跡、
 6 : 重平衛沢 2 遺跡、 7 : 船泊遺跡、 8 : オションナイ遺跡、 9 : 沼の沢チャシ、
 10 : スコトン遺跡、 11 : 水難諸霊の塔遺跡、 12 : 幌泊第 I 遺跡、 13 : 幌泊第 2 遺跡、
 14 : 上泊 2 遺跡、 15 : 上泊 1 遺跡、 16 : 上泊 4 遺跡、 17 : 上泊 3 遺跡、 18 : 東上泊遺跡、
 19 : 鉄府イナウ遺跡、 20 : 西上泊遺跡

第 1 図 礼文島の位置と船泊湾周辺の遺跡

島の最高地点は、礼文岳で 490m であり、低標高の緩やかな起伏もった島である。島の動植物は、利用特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。植生としては、針葉樹としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナギ、草本類ではチシマザサが主体をなしている。

島の北端に広がる船泊湾は、海岸沿いに広がる砂丘列と東部に位置する久種湖で特徴づけられる。湾の東部に位置する久種湖は、周囲 6km ほどの淡水湖である。湖の前面には、船泊砂丘が東西ほぼ 1km にわたり続いている。一方、船泊湾中央部には、島中央部より島最大の河川である大沢川が南から北へ向かい注いでいる。この大沢川の河口から湾の西側スコトン岬方向に向かい東西に長く形成されているのが浜中砂丘である。現状では、地表面から観察することは難しいが、これら船泊砂丘と浜中砂丘は、異なる時期に形成された複数の砂列帯によって構成されている。

第 3 節 遺跡の立地

船泊湾に広がる砂丘では、古くから石器や土器、そして人骨が出土することが知られてきた。これまでの調査でも縄文文化からアイヌ文化期のわたる複数の遺物包含層の存在が知られている。船泊湾東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化後期から、続縄文文化期、オホーツク文化期からアイヌ文化期にわたる遺物包含層が確認されている。この船泊砂丘の西端には、重平衛沢川が船泊湾に注いでいるが、砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層をもつ重平衛沢遺跡、重平衛沢 2 遺跡が知られている。

船泊湾の中央部には、島内陸部から船泊湾に注ぎ大沢川の河口が位置する。この河口の西側に浜中砂丘には、浜中 1 遺跡と浜中 2 遺跡が位置する。浜中 1 遺跡は、国道の北側の海側に貝層や墓が集中する地点として早くから知られてきており、数多くの人骨資料が長年にわたり収集されてきた。遺跡の時期は、オホーツク文化から近世アイヌ文化期と推定されている。一方、浜中砂丘の南、後背丘陵の裾野には、神崎ウエンナイ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグラウンドおよび旧教員宿舎において続縄文文化期の遺物を含む数多くの土器や石器、動物骨が出土している。またグラウンドの造成時に人骨が数多く出土したという。

浜中 2 遺跡の範囲は、現在の浜中集落にほぼ重なる。現在、国道がこの浜中砂丘を東西に貫いて走っており、集落中央に砂丘の最も高い地点をもち、標高は 10m を計る。砂丘の東西端では、緩やかな傾斜を示し、砂丘自体の比高差は 5m 程度である。

この浜中 2 遺跡は、いくつもの文化層が累積する多層位遺跡として知られている。1987 年には、国道の拡幅を原因とする事前調査が行われ、続縄文文化からオホーツク文化にかけての生活面が累積することが明らかとなった。また 1990 年には浜中集落の配水管の付替え工事に際する事前調査が行われ、浜中砂丘の包含層が続縄文文化期からアイヌ文化期にかけての多層位遺跡であることが明らかとなった。その後、1990 年代に筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が継続的に実施され、浜中 2 遺跡には、厚い貝層や住居、墓をともしなう複合的な生活痕跡が長年にわたって累積していることが明らかにされている。また 2011 年 4 月末から 5 月に上旬にかけて千葉大学文学部考古学研究室によって浜中砂丘の最高地点（旧中島商店敷地）において、発掘調査が実施されている。

第 4 節 調査組織と参加者

2011 年度の調査は、2011 年 7 月 1 日から 8 月 6 日かけて実施された。BHAP では、本調査を若手研究者育成の国際フィールドスクールとして位置づけており、今年度は、アメリカ（ポートランド

州立大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハワイ大学) 5 名、カナダ (アルバータ大学、サイモン・フレーザー大学) 9 名、英国 (ケンブリッジ大学、オックスフォード大学) 3 名、オランダ (ライデン大学) 1 名、台湾 (国立台湾大学) 1 名、ルーマニア (ブカレスト大学) 1 名、日本 (東京大学、慶応義塾大学、琉球大学、立教大学、北海道大学) 11 名の 7 カ国から 31 名の学生、院生が調査に参加した。国際フィールドスクールのインストラクターとしては、カナダ (アルバータ大学、マックエワンカレッジ)、イギリス (オックスフォード大学)、日本 (北海道大学) の教員が参加した。また、北海道アイヌ協会からも 3 名の参加している。

第3章 調査区について

第1節 調査区の設定

浜中砂丘は、現在の浜中集落が位置する海岸沿いの大きな砂列帯と、大沢川左岸、神崎小学校側に延びる小規模の複数の砂列帯で構成されている。内陸側の小規模な砂列帯は、集落や畑作などによる地形改変の結果、現状でその起伏を確認することはできない。

2011年度の調査区は、比高5mをもち、続縄文文化期からアイヌ文化期の貝層を含む浜中砂丘の南側斜面と、後背地へ続くより小規模の砂列帯の広がりの確認、またこれらの空間領域における居住領域および埋葬地の確認をめざして調査区を設定した。なお、調査区は1992年に筑波大学が調査区を設定したⅠ地点の東隣となる。

グリットの設定は、調査地を借用した中谷栄氏の所有地の南西隅に基準杭を設置し、4m四方のグリットを設定している。グリットの番号は、南北方向をアラビア数字で、東西方向はアルファベットで表記し、これらの交差点をもって呼称している（第2図参照）。

2011年度の発掘対象範囲は、南北に4m、東西に12m、A03、B03、C03の3グリットの計48㎡である。

第2節 調査区の層序

調査区で観察された堆積層は、砂丘形成層としての砂層と人為的に堆積された魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。これらは、互層状となって厚い文化層を形成している。最も厚く堆積している魚骨層はラミナ状に堆積しており、調査区全域に連続して広がるものではなく、部分的に重なりながら、局所的に広がりを見せて堆積している。

調査区全体でみると、上層から

Ⅰ層：現表土および攪乱層。

Ⅱ層：近世文化期、アイヌ期のアワビの貝層を含む。

Ⅲ層：オホーツク文化期の魚骨層。

Ⅳ層：無遺物砂層。

Ⅴ層：十和田文化期の生活面および獣骨層。

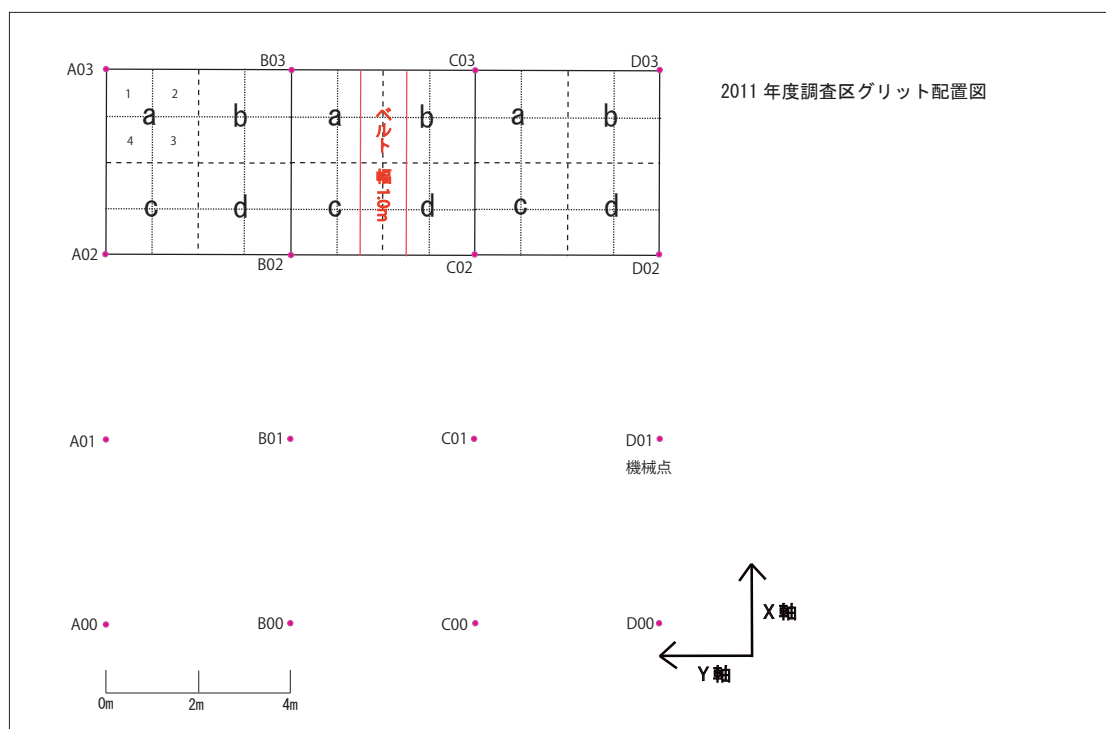
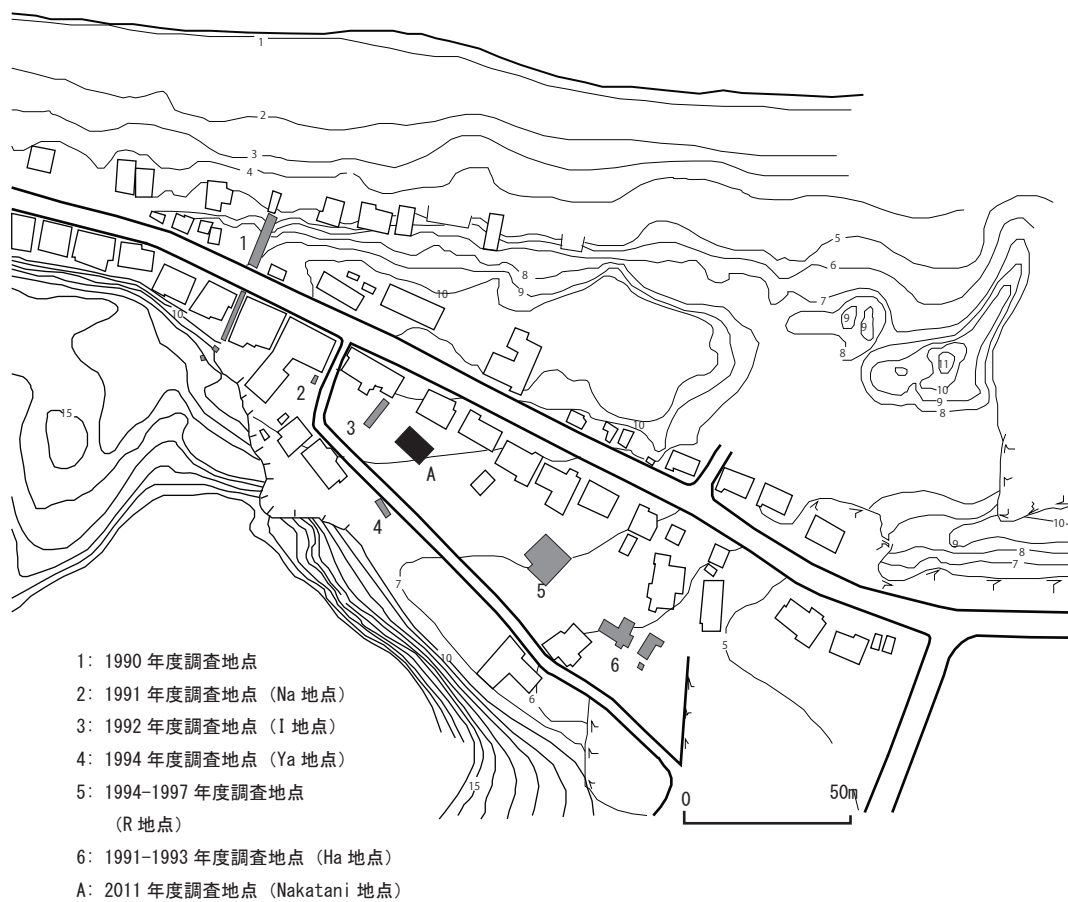
Ⅵ層：無遺物砂層。

Ⅶ層：続縄文文化期の包含層、となる。

特に魚骨層は、複数回の投棄により形成されており、部分的に細分することができる。またⅢ層の魚骨層はA03区からB03区にかけて見られるが、B03区からC03区にかけては広がりを見せない。C03区では、Ⅱ層の砂層の堆積の下位に十和田文化期の獣骨層と生活面が確認される。以下では、このようなA03区とC03区の堆積層の違いから、調査区における堆積層の説明をA03区とC03区に分けて説明する。

1) A03区で観察された堆積層について

A03区では、調査区地表面が北西隅を頂点に円錐状に南、南東、東方向にゆるやかに傾斜した斜面を呈していた。調査区で観察された堆積層もこのような現地表面の傾斜を反映して、緩やかに南側に傾斜した堆積となっている。



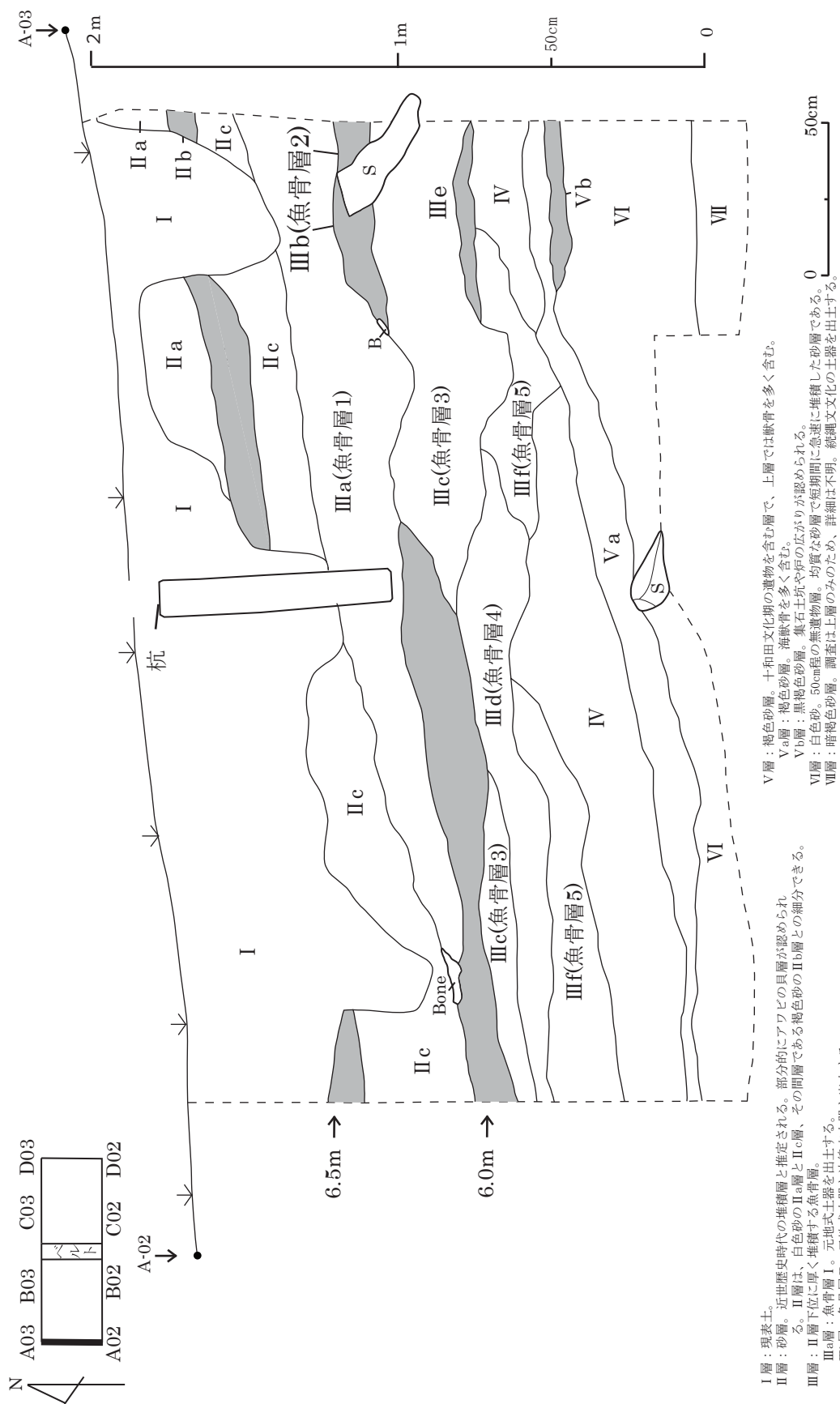
第2図 調査地点と周辺の地形

A03 区西壁の層序

- I 層：現表土。耕作による攪乱や畑としての利用時に打ち込んだ杭などによる攪乱層。
- II 層：砂層。近世歴史時代の堆積層と推定される。部分的にアワビの貝層が認められる。今回の調査では明確な貝層としては確認することはできなかったが、アワビの表面には、断面四角形の金属製のヤスによる刺突痕が見られる。II 層は、白色砂の II a 層と II c 層、その間層である褐色砂の II b 層との細分できる。調査区の大半において II 層は構成の攪乱を受けている。
- III 層：II 層下位に厚く堆積する魚骨層。A03 区西壁では約 1 m の層厚を計る。魚骨とウニ殻を主体として、海獣骨を多く含んでいる。色調や魚骨の構成、炭等の含有度から III a 層から III f 層までに 6 枚に細分できる。
- III a 層：魚骨層 I。元地式土器を出土する。
- III b 層：魚骨層 II。元地式土器と沈線文土器を出土する。
- III c 層：魚骨層 III。沈線文土器を出土する。
- III d 層：魚骨層 IV。沈線文土器を出土する。
- III e 層：黒褐色砂。刻文土器を出土する。
- III f 層：魚骨層 V。刻文土器を出土する。
- IV 層：白色砂。無遺物層。40–50cm の層厚をもつ。均質な砂層で短期間に急速に堆積した砂層である。
- V 層：褐色砂層。十和田文化期の遺物を含む層で、上層では獣骨を多く含む。下層では、炉や集石遺構が見られ、生活面を形成している。
- V a 層：褐色砂層。海獣骨を多く含む。
- V b 層：黒褐色砂層。集石土坑や炉の広がりが見られる。
- VI 層：白色砂。50cm 程の無遺物層。均質な砂層で短期間に急速に堆積した砂層である。
- VII 層：暗褐色砂層。調査は上層のみのため、詳細は不明。続縄文文化の土器を出土する。

2) C03 区で観察された層序

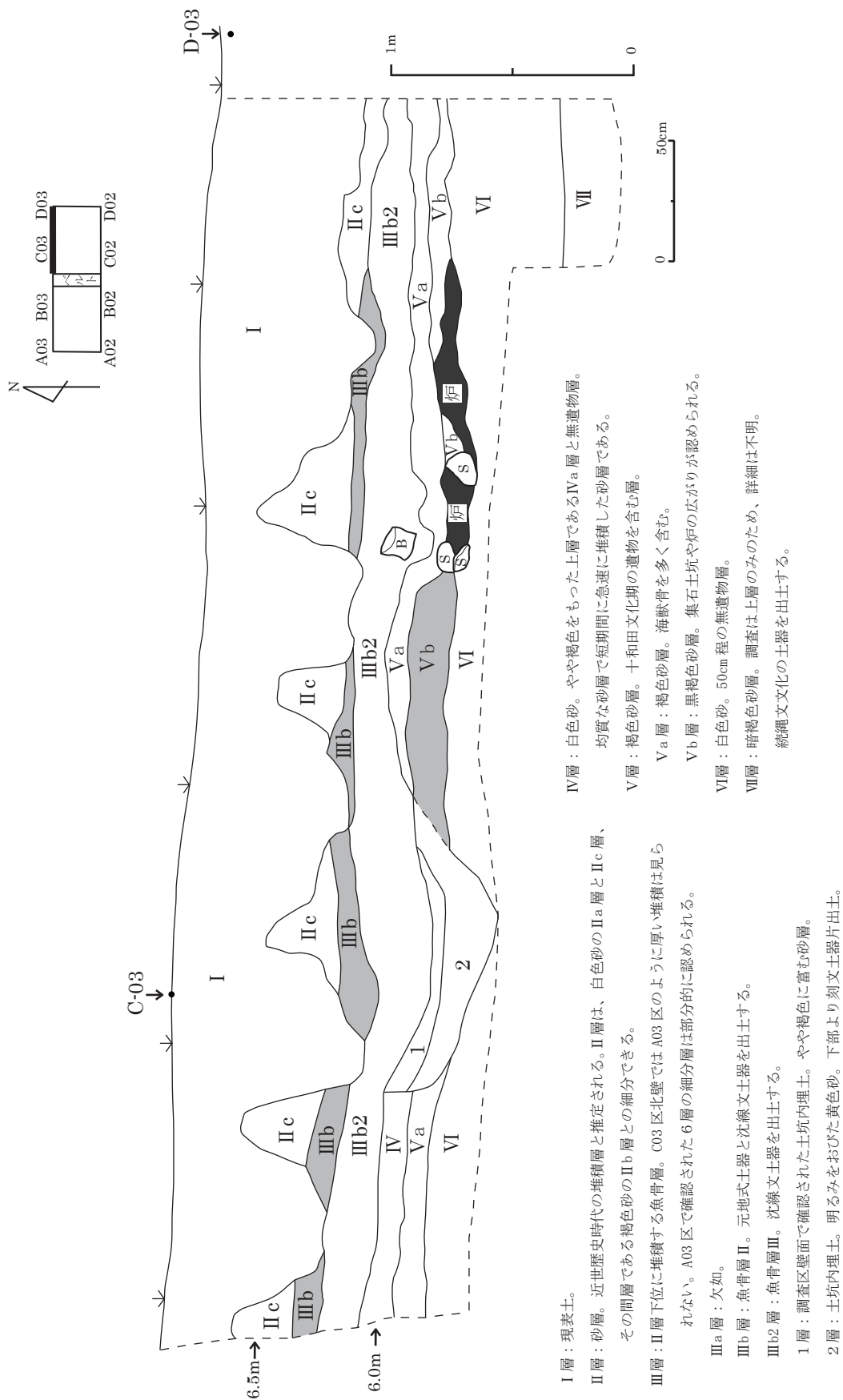
- I 層：現表土。耕作による攪乱や畑としての利用時に打ち込んだ杭などによる攪乱層。
- II 層：砂層。近世歴史時代の堆積層と推定される。部分的にアワビの貝層が認められる。今回の調査では明確な貝層としては確認することはできなかったが、アワビの表面には、断面四角形の金属製のヤスによる刺突痕が見られる。II 層は、白色砂の II a 層と II c 層、その間層である褐色砂の II b 層との細分できる。調査区の大半において II 層は構成の攪乱を受けている。
- III 層：II 層下位に堆積する魚骨層。C03 区北壁では A03 区のように厚い堆積は見られない。A03 区で確認された 6 層の細分層は部分的に認められる。
- III a 層：欠如。
- III b 層：魚骨層 II。元地式土器と沈線文土器を出土する。
- III b2 層：魚骨層 III。沈線文土器を出土する。
- III f 層：魚骨層 V。刻文土器を出土する。
- IV 層：白色砂。やや褐色をもった上層である IV a 層と無遺物層。40–50cm の層厚をもつ。均質な砂層で短期間に急速に堆積した砂層である。
- V 層：褐色砂層。十和田文化期の遺物を含む層で、上層では獣骨を多く含む。下層では、炉や集



I 層：現表土。
 II 層：砂層。近世歴史時代の堆積層と推定される。部分的にアワビの貝層が認められる。II 層は、白色砂のIIa層とIIc層、その間層である褐色砂のIIb層との細分できる。
 III 層：II 層下に厚く堆積する魚骨層。
 IIIa層：魚骨層 I。元地式土器と沈線文土器を出土する。
 IIIb層：魚骨層 II。元地式土器と沈線文土器を出土する。
 IIIc層：魚骨層 III。沈線文土器を出土する。
 IIId層：魚骨層 IV。沈線文土器を出土する。
 IIIf層：魚骨層 V。刻文土器を出土する。
 IV 層：白色砂。無遺物層。40-50cmの層厚をもつ。均質な砂層で短期間に急速に堆積した砂層である。

V 層：褐色砂層。十和田文化期の遺物を含む層で、上層では獣骨を多く含む。
 Va層：褐色砂層。海獣骨を多く含む。
 Vb層：黒褐色砂層。集石土坑や炉の広がり認められる。
 VI 層：白色砂。50cm程の無遺物層。均質な砂層で短期間に急速に堆積した砂層である。
 VII 層：暗褐色砂層。調査は上層のみのため、詳細は不明。続縄文文化の土器を出土する。

第3図 調査区土層堆積図 その1



第4図 調査区土層堆積図 その2

石遺構が見られ、生活面を形成している。

V a 層：褐色砂層。海獣骨を多く含む。

V b 層：黒褐色砂層。集石土坑や炉の広がり認められる。

VI層：白色砂。50cm 程の無遺物層。均質な砂層で短期間に急速に堆積した砂層である。

VII層：暗褐色砂層。調査は上層のみのため、詳細は不明。続縄文文化の土器を出土する。

第4章 検出された遺構

第1節 墓（第5図）

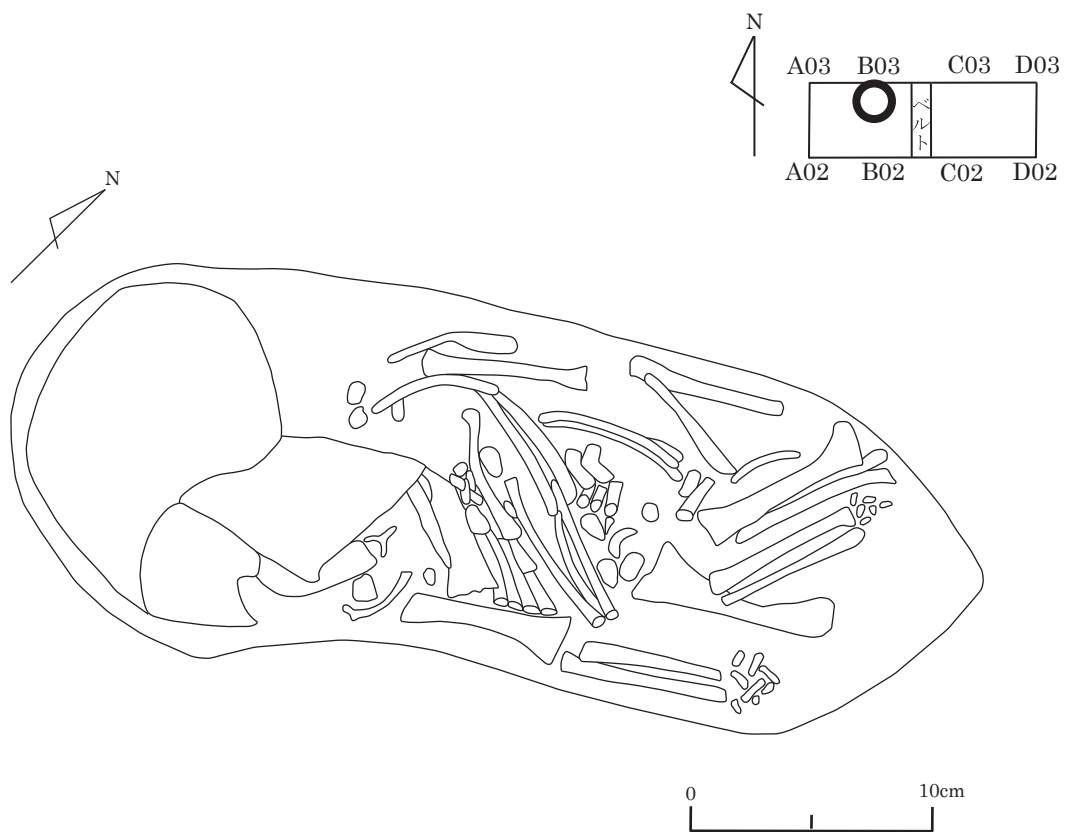
Ⅲ層を構成するオホーツク文化期の魚骨層を掘り下げた後に検出された埋葬事例である。検出面は、Ⅳ層中であり、掘り込み面は、それよりも上位のⅢf層下部である。

遺体を埋葬した土坑は、長軸 100cm、短軸 40cm の浅く掘りくぼめた楕円形を呈している。副葬品は見られない。乳幼児の埋葬事例である。

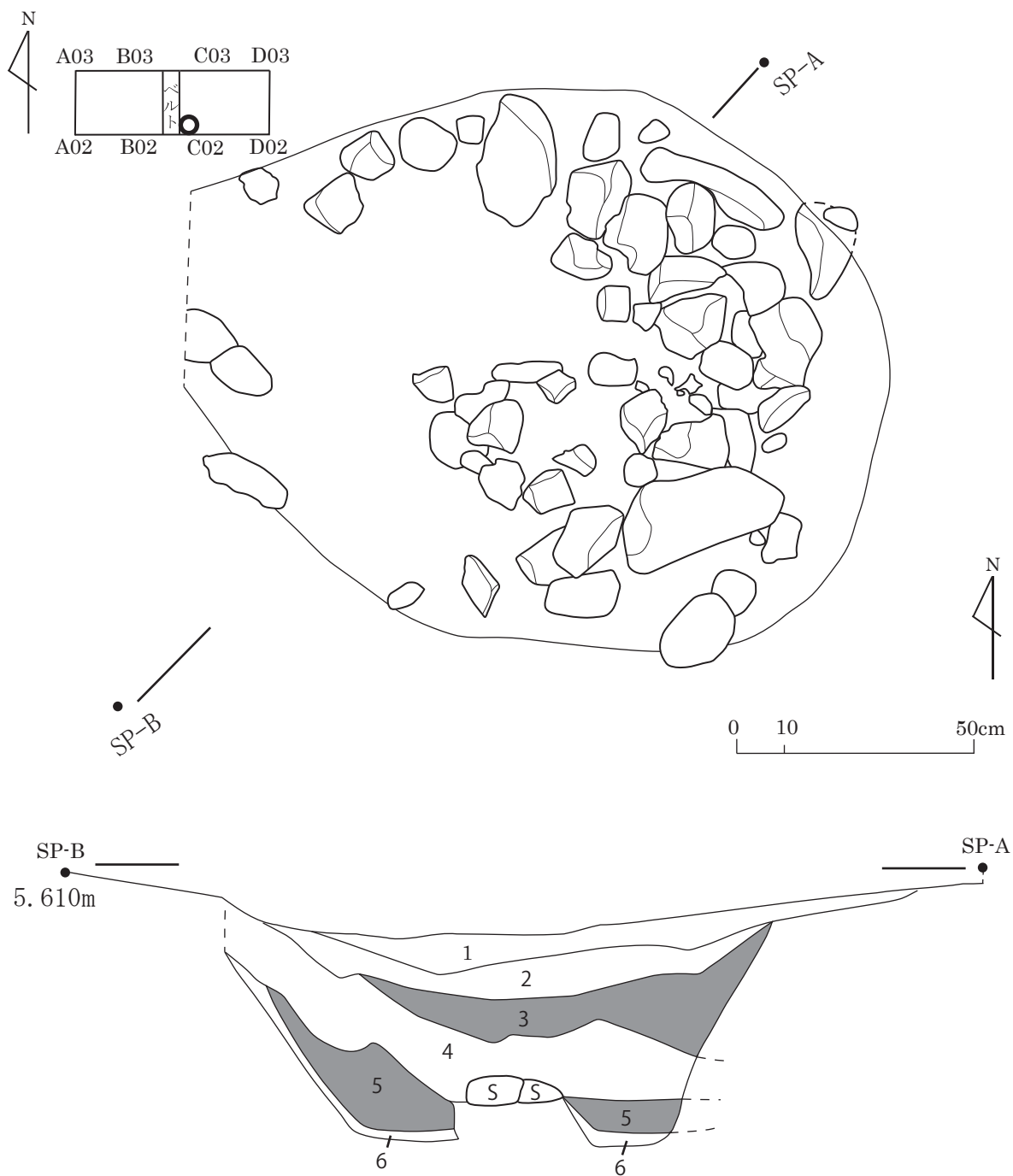
第2節 集石土坑（第6図）

B03 区南においてⅤ層中で確認された大型の集石遺構である。土坑上面は楕円形の炭の広がりを示し、土坑として確認された。長軸 140cm、短軸 114cm を計る。土坑周辺からは、十和田式土器の集中が数カ所見られることから、本土坑も十和田期の土坑と判断される。

半裁して土坑内の堆積状況を観察したところ、土坑内部には、拳大から人頭大の礫が充填されていた。土坑の深さは 43cm を計る。土坑内部には炭混じりの土層が堆積しており、下部ほど炭の密度が高い。



第5図 墓



集石土坑 覆土土層注記

- 1 : 暗灰色砂層
- 2 : 明黄色色砂層
- 3 : 直径 20cm の炭塊を含む炭層
- 4 : 明黄色砂層
- 5 : 炭層、炭化材を含む
- 6 : 暗黄色砂層

第 6 図 集石土坑

第5章 主な出土遺物

第1節 出土遺物の構成

調査においては、アイヌ文化期と推定されるⅡ層から続縄文文化期の遺物を出土するⅦ層まで各層から多様な遺物が出土した。現在、各層ごとの出土総数を確認中であるが、調査区から出土した資料の内、3Dデータを記録した取り上げ資料は、計5015点となる。その内訳は、動物遺存体 1310点、土器類 1773点、石器類 1909点、骨角器類 23点である。

第2節 主な出土遺物（土器類）：第7・8図

今年度の調査では調査区全体から土器が出土した。主体はオホーツク文化期のもので、いわゆる元地式、沈線文段階、刻文段階、十和田式、鈴谷式などの各段階の土器が確認されている。その他少数ではあるが、続縄文文化期の土器も確認されている。完形で出土した土器はミニチュアのものを含めて7点あるが、破片から完全な器形復元が可能な土器は確認されていない。

第7図1～14はいずれも口縁部片。15は胴部片。

1. 口唇部に近い場所に横走する1列の内面から外面に突瘤文(ⅠO)が施されている。完全に孔が貫通しているものと突瘤状になっているものと両方が確認できる。
2. 文様は上部に円形の外面から内面に突瘤文(ⅠO)が、下部に2列の横走する浅い沈線文があり、そこから斜め上方向と斜め下方向に細い線刻文が「く」の字状に施されている。
3. 上部に円形の外面から内面に突瘤文(ⅠO)が、下部に3列の横走する沈線文が施されている。突瘤文は貫通していない。
4. 文様は2列の刺突文が施されている。上部の刺突文は円形を、下部は三角形をなしている。
5. 肥厚帯を有し、文様は横走する1列の舟形の刻文が施されている。
6. 厚い肥厚帯を有している。文様は肥厚帯の端部に近い所に縦長の刻文が深く施されている。
7. 文様は3列の横走する摩擦式浮文とその1、3列目の直上に横走する刻文が施されている。
8. 口唇部が外面にせり出すようになっており、そのせり出した口唇部の直上に縦長の刻文が施されている。また、2列の横走する摩擦式浮文が施されている。
9. 文様は横走する2列の沈線文の間に1列の横走する刻文が施されている。
10. 口唇部が外面にせり出すようになっており、その直上に縦長楕円形の刻文が施されている。横走する4列の沈線文とその2列目と3列目の間、3列目と4列目の間にそれぞれ横走する刻文が施されている。
11. 文様は4列の沈線文とその直上に斜めに刻みをいれた刻文が横走するものが施されている。
12. 口唇部が外面にせり出すようになっており、その直上に刻文が施されている。上部に3列の横走する摩擦式浮文、頸部に横走する斜めに刻みを入れた刻文が1列施されている。
13. 文様は横走する3列の比較的浅い沈線文が施されている。
14. 文様は4列の横走する幅1cmほどの刻文とその間を横走する3列の沈線文が施されている。口唇部に近い内面にコゲが多少付着している。
15. 文様は上部に2列の横走する沈線文とその間に並行する2列の沈線文が鋸歯状に横走しているもの、下部に2列の横走する沈線文とその間に斜めに刻みを入れた刻文が施されている。



第7図 主要出土遺物（土器1）



1

HA 1888
グリッド：A03-a-2
長さ：123.35mm
巾：160.57mm
厚さ：9.21mm



2

HA 0010
グリッド：A03
長さ：91.82mm
巾：105.8mm
厚さ：7.19mm



3

HA 1562
グリッド：試掘坑出土
器高：38.02mm
直径：38.79mm



4

HA 0860
グリッド：A03-a-3
器高：38.17mm
直径：91.78mm



5

HA 4293
グリッド：A03-d-1
器高：90.98mm
直径：72.36mm



6

HA 0073
グリッド：試掘坑出土
器高：73.45mm
直径：105.93mm



7

HA 0355
グリッド：C03-a-3
器高：67.8mm
直径：107.35mm



8

HA 0364
グリッド：B03-d-1
器高：106.8mm
直径：99.51mm



9

HA 4976
グリッド：A03-b-4
器高：94.0mm
直径：101.83mm



10

HA 5024
グリッド：A03-b-4
器高：119.9mm
直径：98.95mm



11

HA 4867
グリッド：A03-d-4
器高：135.1mm
直径：131.36mm

第8図 主要出土遺物（土器2）

第8図 1は胴部片、2は口縁部片、3～5、7～11は完形土器、6は底部片。

1. 文様は3列の横走する沈線文とその列の間にそれぞれ横走する刻文が施されている。
2. 口唇部が外面にせり出すようになっている。文様は2列の横走する摩擦式浮文が施されている。補修孔と見られる孔があげられている。
3. 文様は横走する1列の刺突文、その下に縦方向に3～5個の刺突文を連続させたものが横走している。さらにその下に1列の沈線が鋸歯状に横走したものが施されている。
4. 器形は口縁部から底部となる異形をなしている。薄い肥厚帯を有している。文様は肥厚帯の上、端部にそれぞれ1列の横走する沈線文、肥厚帯の端部に1列の横走する刻文、その下部に周囲が盛り上がるように1列の刺突文、さらに2列の横走する沈線文が施されている。
5. 文様は横走する1列の内面から外面に突瘤文(IO)が施されている。
6. 文様はない。比較的厚い。底部面に圧痕は見られない。
7. 器形は口縁部から底部となる異形をなしている。薄い肥厚帯を有している。文様は上部に5列以上の横走する摩擦式浮文が、その下にボタン状の貼付文が等間隔で1列施されている。
8. 薄い肥厚帯を有している。文様はない。内外面ともに上部にコゲが多少付着している。
9. 口唇部が外面にせり出すようになっており、その直上に刻文が施されている。文様は口唇部に近い所に4列の横走する摩擦式浮文、その下に2列の横走する刻みの入った貼付文が施されており、上の刻みの入った貼付文上に1カ所ボタン状貼付文がある。
10. 文様は口唇部に近い所と頸部の下部に横長の刻文がそれぞれ1列横走しているものが施されている。
11. ほぼ屈曲のない器形をしている。文様はない。

第3節 主な出土遺物(石器類): 第9・10図

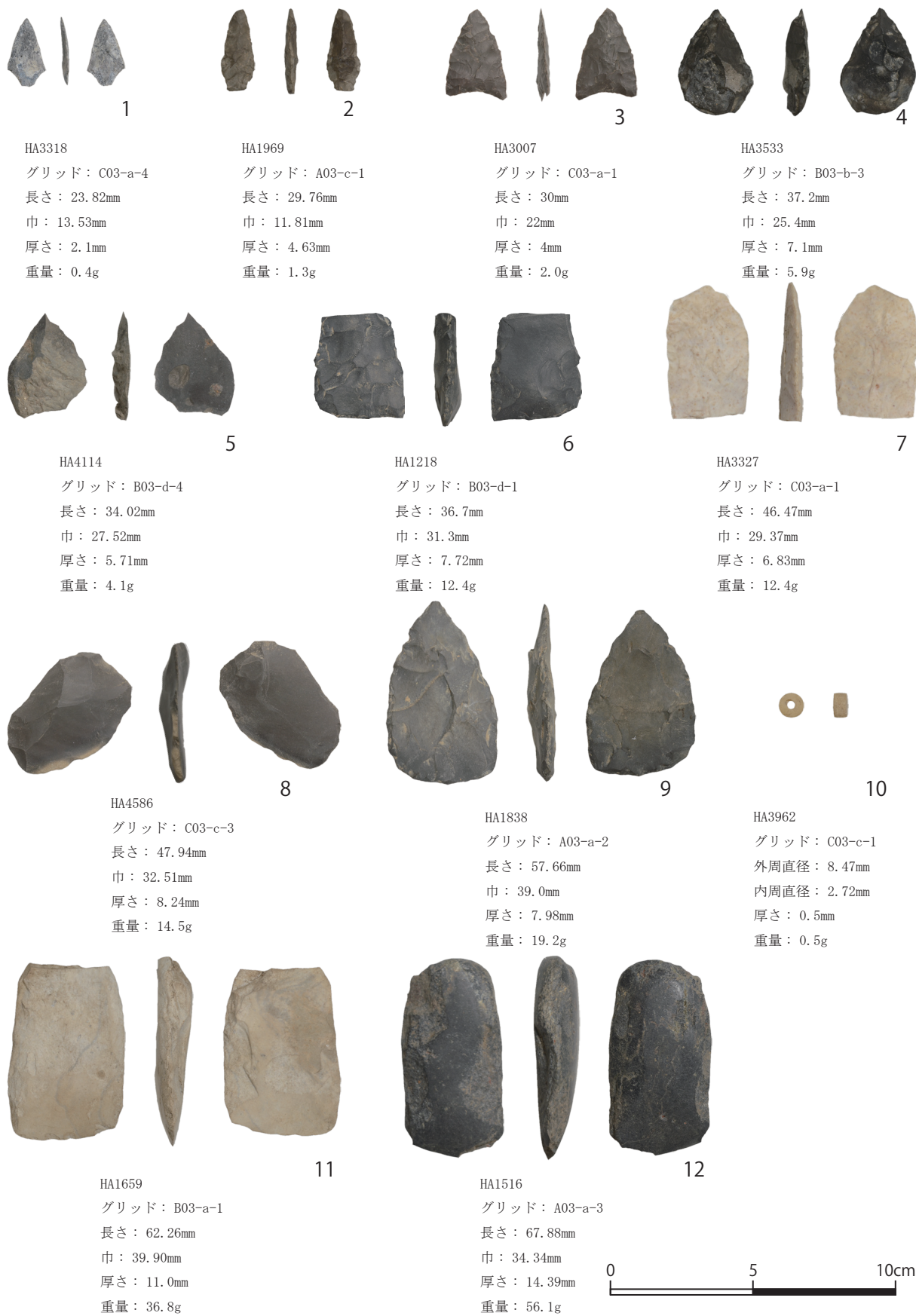
今年度出土の石器は製品の数が少なく、大多数は剥片である。石材は頁岩、砂岩、メノウが主である。

第9図

1. 石鏃: メノウ製。有茎で縁辺の二次加工は顕著だが中央部にはない。被熱している。
2. 石鏃: 頁岩製。有茎で全体的に二次加工が顕著である。先端部が破損している。
3. 石鏃: 頁岩製。無茎で基部が凹む凹基である。入念な二次加工が施されている。
4. 石鏃未製品: 頁岩製。背面・腹面共に先端部周辺への二次加工が見られる。
5. 石鏃未製品: 頁岩製。背面周縁部への二次加工が見られる。
6. 尖頭器: 頁岩製。無茎で背面への入念な二次加工があり、腹面への二次加工も見られる。
7. 両面加工石器: メノウ製。両面全体に入念な二次加工が見られる。
8. 剥片: 頁岩製。腹面下端周縁部に使用による剥離痕が見られる。
9. 尖頭器: 頁岩製。無茎で両面に二次加工が見られる。
10. 平玉: メノウ製。円筒形で磨研により整形されている。
11. 石斧: 砂岩製。片刃で刃部に敲打痕が見られる。刃部を中心に磨研されているが、両側縁を含むその他の部分は表面が破損している。
12. 石斧: 泥岩製。片刃で刃部に使用による破損が見られる。磨研された部分を多く残すが、側縁、表面は破損が著しい。

第10図

1. 剥片: 頁岩製。周縁部全体に使用による剥離痕が見られる。



第9図 主要出土遺物（石器1）



1

HA1603
グリッド：A03-d-2
長さ：63.98mm
巾：33.5mm
厚さ：11.8mm
重量：14.6g



2

HA3708
グリッド：A03-d-2
長さ：70.89mm
巾：40.76mm
厚さ：12.64mm
重量：33.3g



3

HA1375
グリッド：C03-a-4
長さ：63.97mm
巾：44.08mm
厚さ：22.58mm
重量：59.1g



4

HA1916
グリッド：A03-c-2
長さ：84.0mm
巾：39.28mm
厚さ：7.77mm
重量：22.5g



5

HA3821
グリッド：A03-b-3
長さ：87.2mm
巾：53.53mm
厚さ：13.85mm
重量：68.7g



6

HA4292
グリッド：A03-d-1
長さ：112.11mm
巾：52.29mm
厚さ：18.84mm
重量：152.5g



第10図 主要出土遺物（石器2）

2. 剥片：頁岩製。腹面左側縁に使用による剥離痕が見られる。
3. 剥片：砂岩製。下端の鋭利な部分に使用による剥離痕が見られる。
4. 剥片：頁岩製。両側縁全体に使用による痕跡および剥離痕が見られる。
5. 剥片：頁岩製。表面左側縁から二次加工が施されている。下端部には使用による剥離痕が見られる。
6. 石斧：泥岩製。片刃で刃部に敲打痕が見られる。両側縁、両面共に破損が著しい。

第4節 主な出土遺物（骨角器）：第11～13図

今年度の調査では23点の骨角器と多くのカットマークの入った骨、面取りを施した骨が確認されている。本遺跡は骨の残存率が非常に良好であり、骨角器も良好な状態で出土している。

第11図

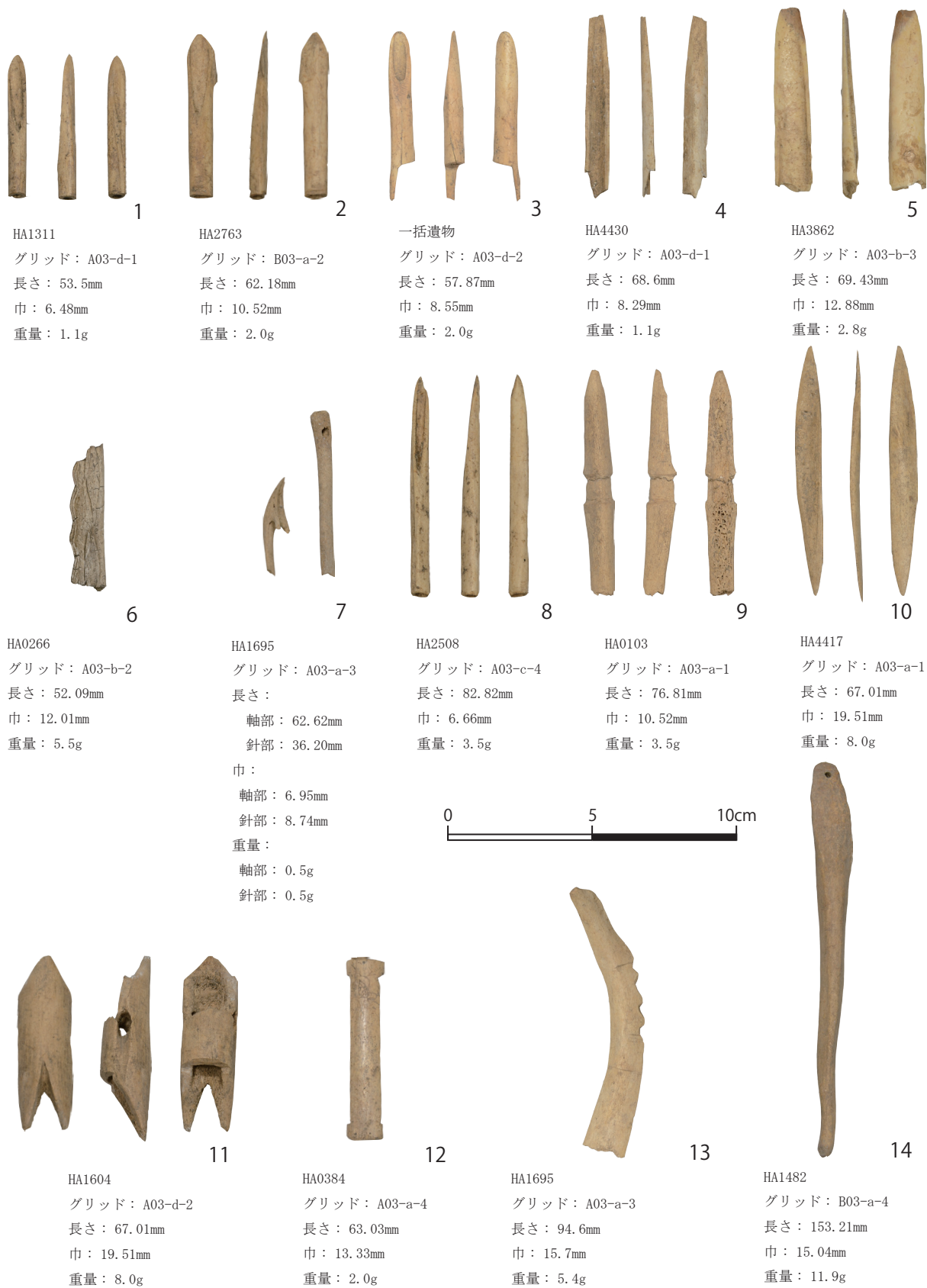
1. 骨鏃：鳥管骨製。一端を鋭利に加工している。
2. 骨鏃：鳥管骨製。一端を鋭利に加工している。もう一端には装着痕と見られる擦痕と凹みが見られる。
3. 骨鏃：鳥管骨製。一端を鋭利に加工している。もう一端は基部が一部長くなっているが、加工面の仕上がりからこれはあえて残していると考えられる。
4. 骨鏃：鳥管骨製。破損品。鋭利に加工した面のみ残存している。
5. 骨鏃：鳥管骨製。破損品。鋭利に加工した面のみ残存している。
6. 組み合わせ式釣針軸部：破損品。一側縁を波状に加工している。多少の被熱を受けている。
7. 釣針：鳥骨製。破損品。軸部と針部から成る。軸部は一端に孔があげられているが、貫通はしていない。針部は逆刺があり、先端は鋭利に加工している。
8. 骨鏃：鳥管骨製。一端を鋭利に加工している。もう一端にはカットマークが見られる。
9. 銚頭：海獣骨製。基部が一部破損している。中央部に溝がある。明確な逆刺はない。
10. 銚頭：鳥管骨製。両端を鋭利に加工しており、薄く扁平である。
11. 銚頭：海獣骨製。基部に2本の尾部と中柄などを差し込む孔、中央に横方向に貫通している孔があげられている。先端は鋭利に加工している。
12. 鳥骨製製品：縦に半裁した鳥骨の両端部を残し、「I」の形状をしている。
13. 組み合わせ式釣針軸部：鳥骨製。破損品。一側縁を波状に加工している。
14. 組み合わせ式釣針軸部：海獣骨製。一端に貫通した孔があげられている。

第12図

1. 組み合わせ式釣針軸部：破損品。一端に溝が作られている。
2. 針入れ：未製品。一端に5本の線刻が施されている。
3. 針入れ：破損品。菱形の線刻が施されている。
4. 骨斧：破損品。基部が破損している。先端部は丸く面取りされている。
5. 骨斧：破損品。基部が破損している。先端部にかけて薄く加工している。
6. 骨斧：柄部が作り出されている。使用のためか先端部がやや破損している。
7. 骨斧。柄部が作り出されている。二つの縦長の孔があげられている。

第13図

1. 骨斧。海獣骨製。基部が傾いている。
2. 骨斧。未製品。鯨骨製。側縁は面取りしてある。



第 1 1 図 主要出土遺物（骨角器 1）



1

HA0855

グリッド： B03-a-1

長さ： 180.59mm

巾： 15.68mm

重量： 28.3g



2

一括遺物

グリッド： A03-a-3

長さ： 11.30mm

巾： 15.45mm

重量： 9.2g



3

HA5033

グリッド： A03-b-4

長さ： 12.11mm

巾： 13.00mm

重量： 7.2g



4

HA0319

グリッド： C03-d-2

長さ： 99.82mm

巾： 40.78mm

重量： 36.5g



5

HA0090

グリッド： 試掘坑出土

長さ： 144.41mm

巾： 49.84mm



6

HA0167

グリッド： A03-a-4

長さ： 197.29mm

巾： 58.93mm



7

HA01752

グリッド： A03-a-2

長さ： 198.56mm

巾： 101.50mm

第 1 2 図 主要出土遺物（骨角器 2）



1

HA01750

グリッド：A03-d-2

長さ：234.90mm

巾：147.33mm

重量：135.4g



2

一括遺物

グリッド：C03-a-1

長さ：291.44mm

巾：138.34mm

重量：665.0g



第 1 3 図 主要出土遺物（骨角器 3）

第6章 まとめ

2011年の浜中2遺跡の調査では、オホーツク文化終末期から続縄文文化期までの生活面が砂丘層内に良好な魚骨や獣骨層をともなつて確認された。本年度の調査においては、浜中砂丘を構成する貝塚マウンドの南端を確認すること、居住空間と埋葬空間の空間的範囲を確認することを目指した。調査の結果、明らかとなった諸点は以下の通りである。

1. 近世のアイヌ文化期のアワビの貝層については、調査区上層において部分的に確認されたが、現代の畑作などで攪乱されており、面的な広がりや詳細を検討することはできなかった。
2. 調査区東部の A03 区においては、厚い魚骨層が確認されたが、その広がりには部分的であり、ラミナ状に分布域を変えながら堆積していることが確認された。
3. オホーツク文化期の埋葬事例は、新生児の墓が1基確認された。1991年に調査されたI地点での検出事例に続き、周辺に乳幼児や小児の埋葬群が分布する可能性が想定される。
4. オホーツク文化期の獣骨層には、イヌとカラフトブタの動物遺存体が数多く検出された。出土状態からまとめて投棄された個体と推定される。オホーツク文化期の家畜動物利用を復元する貴重な資料となろう。
5. オホーツク文化期の魚骨層、獣骨層の下位に無遺物層の砂層を挟んで、集石土坑な炉を伴う十和田文化期の生活面が安定して広がることが確認できた。
6. 十和田文化期の生活面の下位に急速に堆積した砂層が確認された。年代的に古墳寒冷期に相当すると推定され、浜中砂丘の形成過程において気候変動との相関性を検討できる良好な資料であると思われる。
7. A03 区においてコラムサンプルを採取した。魚骨層の構成や獣骨の詳細について分析中である。

出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターにおいて整理作業を継続中である。2012年冬には、久種湖においてボーリング調査を実施しており、気候変動と砂丘形成の相関も含めた古環境復元分析もベルリン自由大学地球科学部と鳴門教育大学自然・生活系教育部において進められている。

また動物遺存体については、A03 区に設定したコラムサンプル資料も含めて、慶応義塾大学文学部民族考古学研究室において分析中である。家畜動物の古代 DNA 分析については、北海道大学大学院理学研究院遺伝的多様性研究室において分析中である。出土人骨については、琉球大学大学院医学研究科人体解剖学研究室において分析中が行われている。これらの各種の分析を含めて、調査成果の詳細については、今後の調査研究の成果を加味しながら、総合的に比較検討を行った後に、成果報告を行って行きたい。

北海道礼文町

浜中 2 遺跡 2011 年度発掘調査概要報告書

発行日 2012 年 3 月 31 日

編集 加藤博文・岩波連・平澤悠・鈴木建治

発行 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 6 丁目

印刷・製本 柏陽印刷株式会社

